

レポート

アジアの村のごみ事情を現地で学ぶ

学生向けエコツアー

in インドネシア・ロンボク島

ラボ
NPO 法人ゆいツール開発工房

目次

1. ツアー概要 1
2. ロンボクで感じた思いやりの文化 2
3. ロンボク島のエコツーリズムについて 5
4. インドネシアのごみ問題・環境問題 8
5. ロンボク島のごみ銀行について 11
6. ごみ問題の側面から見た異文化理解について 16

1. ツアー概要

【日程】2016年12月21日（水）～30日（金）

【参加者】

任 慈（Ren Ci）東京農工大学大学院
篠原 優衣（Yui Shinohara）酪農学園大学2年生
長澤 美佳（Mika Nagasawa）社会人
若松 幸秀（Yukihide Wakamatsu）神戸大学大学院
服部 詩織（Shiori Hattori）都内の大学3年生

【スケジュール】

日にち	内容
12月21日（水）	羽田空港集合、ジャカルタへ 乗り換えてロンボク島へ
12月22日（木）	市場見学、「ごみ銀行ってなんだろう？」（マタラム市周辺）
12月23日（金）	タナ・ベア村で伝統菓子づくり体験、村の若者と交流など 村に宿泊
12月24日（土）	ドラゴンフルーツ狩り、ワークショップ参加（自己紹介、村のいいところ、気になるところなど）、村に宿泊
12月25日（日）	ごみの調査、ワークショップ参加（村ツーリズムを発展させるためにできること）
12月26日（月）	ヒンドウの寺院（公園）散策、ギリ・メノ島へ インドネシア料理づくり体験。（バンガローに宿泊）
12月27日（火）	シュノーケリング体験、ギリ・トラワンガン島のごみ処分場見学
12月28日（水）	NTB マンディリごみ銀行の見学、リサンごみ銀行職人さんのお宅 ロンボクの工芸品などのお土産探し
12月29日（木）	織物の里でお土産探し、ロンボク島からジャカルタ、羽田空港へ

【助成金】

- ・地球環境日本基金
- ・国際交流基金（アジア・市民交流助成プログラム）

2. ロンボクで感じた思いやりの文化

若松 幸秀



留学やホームステイなどの経験のなかった私にとってこのエコツアーは初めての、異文化の中で暮らす体験でした。そんな経験をして今感じていることをまとめてみたいと思います。

エコツアーでは、シュノーケリング、インドネシア料理体験、ヒンドウーの寺院の見学、工芸品を作る様子の見学、ゴミ処理場の訪問など様々な体験をすることができました。その中でも、特に自分の中で印象に残っているのは、ツアーのガイドを務めてくれた若者との交流と中部ロンボクの Tanak Beak (タナ・ベア) 村に滞在したことです。

ツアーの期間中は日本語を勉強中の 5 人の若者がガイドとして付き添ってくれました。私は唯一の男性参加者だったので、ショッピングモールや宿泊場所など彼らと一緒に過ごす時間がとても多く、楽しい時間を過ごすことができました。彼らが日本語を勉強する理由は様々です。妻が日本で働いているので少しでも早く日本に行きたい人もいれば、日本のアニメが好きだからという人やスキーをしたり雪を食べたりしたいと思う人もいました。日本語や英語でコミュニケーションもとれる彼らとの時間は、妙に落ち着いて文化の違いを大きく感じることはあまりない時間でした。友達として接していたからなのかなと思います。

一方で村での滞在中は、全く違いました。村の人たちは友達としてではなく、村に短い期間だけれど住む、いわば家族の一員のように迎えてくれました。

村での私たちの朝は村の若者たちとの jalan-jalan から始まります。jalan はインドネシア語で「道」という意味で、jalan-jalan で「散歩」です。普段は毎日しているわけではないのですが、家を離れて寄り道しながら歩く事 1 時間、家からだいぶ離れた村役場や市場、学校などがある地域まで行きます。途中で牛に餌やりをしたり、収穫した稲穂からお米を落とす作業をしたり (写真 1) といろいろな事を体験しました。それと同時に家からだいぶ離れても皆が顔見知りで頼めば何でも体験させてくれるような強いつながりがあることに驚きました。



(写真 1 稲穂からお米を落とす)



(写真 2 よく分からない乗り物にみんなで乗ってみる)

道中で知り合った女性は、ロンボクの他の地の出身ですが今はこの近くにある学校で勉強するために市場の近くに住んでいると言っていました。日本で言えば下宿のような感じですが、村の若者たちとも知り合いです。彼らの中には、自分たちの隣人を気にかけるという意識がとても強いように思います。小さな子供から大人や老人まで皆が近くにいる人に興味を持って、さらには思いやりを持って接していました。

昼にはツーリズムについてのディスカッションやおかし作り体験などもしつつ、空いた時間には身近なものを使った遊びを教えてもらったり、サッカーをしたりもしました。言葉があまり伝わらなくてもスポーツをすれば通じ合えるのはどこの国でも同じなのかなと感じました。夜に泊まっている家に帰った後も、たくさんの若者が来てくれてずっと気にかけてくれました。



(写真 3 村の若者たちと)



(写真 4 村のみんなで集合写真)

そんな村の若者たちは決して村の中だけで生きているわけではありません。滞在中、いろいろと気にかけてくれた 17 歳の青年はギリ・トラワンガン島という欧米人に大人気の観光地のホテルで働いているそうです。スマートフォンを持っている若者も多く、彼らは村の外

ともたくさん関わりながら生活しています。情報に関して言えば、私たちが日本に暮らしているのに近いくらい手に入るような状況にあります。(日本ほど情報があふれているわけではありませんが)それでも、彼らの根っこの部分には自分の生まれた場所や家族とのつながりがとても強くあってそこでの時間をとても大事にしていると感じました。

ロンボクは観光地化していく真っ最中だと思います。これから島には情報だけではなく、実際に人も押し寄せてくる段階になるのかもしれませんが。でもその変化は早すぎるということはないのかなと思います。村の人たちは実際に観光地になっている地域のことも知っているし、自分たちの村に私たちのような日本人が来ることについても本当にたくさんの準備をしてくれていました。彼らの思いやりがあれば、決して村や島の文化を過度に商品化することがなく、訪れる人たちと関わっていくことができると思います。

彼らの文化に触れ、一緒に生活したことは私にとって素晴らしい思い出です。今まであまりイメージを持っていなかったインドネシアやムスリムの人たちに対して今ではすごく愛着があり、これからも関わっていきたいと感じています。また、日本語を勉強していたロンボクの若者たちはこれから日本にやってくることも多いようなので、ロンボクで育った彼らに今私たちが生きている日本の感想などを聞ける日がくることもとても楽しみです。

3. ロンボク島のエコツーリズムについて

任 慈



はじめに

2016年12月21日からインドネシアのロンボク島に行ってきました。

ツアーを通して、ゴミ問題、ごみ銀行、文化と宗教など様々なことを学んだり現地の人と交流したりしましたが、今回はエコツーリズムをテーマとして感じたことと考えを述べます。

まずはエコツーリズムの定義を説明します。エコツーリズムは自然環境を保護しながら観光資源を利用しようとする新しい形態の観光として、近年注目を集めています。エコツーリズムの目的として、自然環境への負荷を最小限に抑えながら観光地に貢献できることが、観光産業に期待されています。もともと環境と観光は対立な関係なのですが、この対立を超えて共生というお互いの利益を確保する状態になるのを期待されています。

ロンボク島はインドネシアの中部バリ島の東隣にあり、米、コーヒーなどの栽培がさかんで、豊かな自然資源を持っています。北西部にギリ・アイランド (Gili Islands) と呼ばれる3つの小島 (ギリ・トラワンガン、ギリ・メノ、ギリ・アイル) があり、毎年たくさんの観光客、特に若者が集まっています。インドネシア政府も積極的に観光政策を推進し、ツーリズムも現在島の主な産業の一つとして発展しています。しかし、観光産業を推進する傍ら島の環境はどんどん悪化しており、観光地以外のところもゴミなどの環境問題が注目されています。

今回のツアーでは主にごみ銀行の運営者たちとの意見交換、タナ・ベア村でのゴミ調査、ギリ・メノ島のゴミ処分場の見学という3つの柱があったかと思います。この3つについてエコツーリズムの視点で分析します。

ごみ銀行

今回のツアーでは4つのごみ銀行を訪問しました。ごみ銀行の関係者と話したところによると、現地の一部の人はごみ銀行を利用してゴミを回収する一方、多くの人はまだこういう活動に参加していないということでした。住民が環境保全への意識は持っていないことは、エコツーリズムの発展の妨げになっていると思いました。



(写真1：ごみ銀行が開発した商品)

タナ・ベア村

タナ・ベア村ではゴミ問題や村ツーリズムの発展について若者たちとの意見交換を行いました。村の住民に聞き取り調査をすると、住民たちは村ツーリズムの発展を望んでいるのに、良い環境を提供しないとツーリズムはうまく進まないという認識は足りないのです。若者と交流した後も同じことを感じました。村ツーリズムの活動に熱心に参加している若者たちは、お客さんにいいサービスを提供するため色々と工夫していましたが、村の来訪者（ツアーに参加した私たち）にとっては、環境にはまだ改善すべきところが多いと感じました。若者たちは比較的、環境問題への認識と解決方法を受け入れやすそうでしたが、ワークショップの成果として出た環境保全の必要性や具体的なやり方に対して、今後実行するかどうかはまだわからないなと私は思いました。ツーリズムを推進するためには環境をもっと大きく改善する必要があるということを考えないと、ツーリズムも長く続けられないし、そのために若者への教育は非常に大事なことだと思います。



(写真2：村の人は家の前でゴミを燃やしている) (写真3：海周辺の環境)

ギリ・アイランド

ギリ・アイランドはロンボクのメイン観光地として毎年多くの観光客が訪れ、近年環境問題も深刻になっています。一番印象が残っているのが海辺にゴミが散らばっている光景です。観光客にもよくない印象を与えていると思いました。ギリ・トラワンガン島の中央にある大きなゴミ埋め立て地は、毎日ホテルやレストランなどからのゴミがここに運ばれ、自然環境を破壊していると感じました。これらの観光地で環境を保全するためのシステムが作られていないのは観光地として不足なところだと思います。自然の魅力に惹かれて島に集まってくる観光客に対して良い環境を提供できなければ、今後観光客の減少や経済的な収入の減少につながるかもしれないのです。

まとめ

以上の3点からみると、エコツーリズムという観光の形はロンボク島ではたくさんの課題があります。まず、エコツーリズムは国などの行政の支援やプロモーション活動がないと、地域で実行したり、現地の人々の協力を得たりするのが難しいです。ロンボク島では観光を発展させるため、このまま環境を犠牲にして観光資源を開発しつづけていったら、最後に観光地としての魅力も失うし、持続的な観光資源の開発も不可能になってしまいます。今後環境と観光を両立するため、エコツーリズムのメリットと重要性などを島の住民にもっとアピールすべきだと思います。エコツーリズムを実行する現地の方々が一番重要な役割を担っています。ツーリズムに関する様々な活動を行う一人ひとは島の環境に直接にかかわっているので、もし彼らが環境への配慮を日々心がけたら、エコツーリズムにも貢献するのは間違いありません。最後に、若者への環境教育はやはり大事なものだと感じました。ロンボクの観光資源はまだ開発されていないところが多いので、今後観光産業の推進は若者たちの参加に大きく左右されていくでしょう。よい環境を維持することを常に考えるという意識を若者たちが持つことは、エコツーリズムを支援する人の増加やよりよい観光地の形成には欠かせないことではないでしょうか。

4. インドネシアのごみ問題・環境問題

篠原優衣



私は、インドネシアのごみ問題の現状と現地の人のごみへの見方・捉え方そして、これからどうしたらいいのかの3本立てで話を進めていきたいと思います。

インドネシアのごみ問題の現状について

日本にもごみの問題は存在しますが、それをはるかに上回る現実が現地にはありました。私が見てきた中でとくにごみの量の多さに驚いたのは市場と村と観光地などの島の最終処分場所でした。市場には多くの食材と買い物客がいました。その多さに圧倒されながらも、私はあちらこちらにポイ捨てされているごみに目がいききました。また食べ終わったお菓子のごみや飲み終わった飲み物のごみを何事もなかったかのように捨てていく現地の人々の行動にも。人が集中している市場だからこそ、それに伴ってごみの量も多いなと感じました。

村では村の中のある一角に広場みたいなところがあり、そこにみんなごみを持ってきているようでした。生活で出たプラスチックやペットボトルをはじめ、サンダル、生ごみ、ガラス、三輪車、洋服、おもちゃなど捨てられているごみの種類はさまざまでした。

観光地であるギリ・トラワンガンでは最終処分場を見学しに行きました。そこには大量のごみと、近くでは牛やニワトリの家畜が放し飼いされていました。(写真1) その牛たちがいざれどうなるのかはわかりませんが、もし食用だったとしたら、人間の体に何らかの害が出るのではないかなと心配になりました。私は酪農学園大学に通っていて、身近に牛やニワトリ、馬などの家畜がいることもあり、ごみや糞尿のぐちゃぐちゃしたところで暮らしている牛たちを見て正直胸が痛みました。最終処分場でのごみの種類もさまざまホテルのスリッパなどもありました。そして暖かい気候というのもあってにおいは強烈でした。(写真2) また、ペットボトルなどのお金になるようなものだけは貧しい人たちの手によって一部分だけ分別されていました。(写真3) そのほかは無造作に捨てられているだけで、ごみのかさが増したら燃やすとの事でした。



(写真1 ごみの山の近くで放牧)



(写真2 さまざまなごみ)



(写真3 より分けられたペットボトル類)

現地の人のごみへの見方・捉え方

私たちは、3日間タナ・ベア村でホームステイをしました。そこで参加したワークショップで現地の人のごみへの見方や捉え方を知ることができました。(写真4) 村の中を村人と一緒に回りながら日本人がどういうものを汚いと感じ、不快感を抱くのかを教えたり、村人に「ごみに対する取り組みは何をされていますか?」「ごみが放置されることで環境に与える影響を知っていますか?」など質問したりしました。(写真5) ごみへの取り組みとしては「家の庭はきれいにしている」や「空き地に捨てる」でした。誰かがやってくれるだろうという考えがあるようで、ごみは増える一方でなかなか減らないように感じました。

環境に与える影響としては、「においが気になる。」「蚊がたくさん寄ってくる。」ということでした。また、「ごみを分別して捨てていますか」という問いに対しては「ただ適当に捨てるだけ。」という答えが返ってきました。私はここで、日本は規制があることで綺麗に保たれていて、快適に暮らすことができるのだと感じました。日本にある廃品回収や資源の再利用活動、ごみを捨てる時の袋の決まり事、粗大ごみ処分の際の料金徴収など、面倒だなと思っていましたが、こうしてきれいな環境を作っていくためには必要な決まりごとだったのだ

と納得しました。



(写真4 ワークショップの様子)



(写真5 ごみの調査)

これからどうしていくか

インドネシアだけでなく、正直なところ日本でもごみ問題は存在し、深刻なものになっています。だからこそ日本とインドネシアの文化や価値観の違いをお互いに尊重し、いいものを取り入れていく必要があると私は思います。インドネシアのごみ銀行やごみ銀行の行うごみ再利用商品の開発はごみとは思えないほどいい商品が多くて驚きました。ミネラルウォーターが入ったグラス状のプラスチックの口の部分は重ね合わせることでお盆になるし、飲み物（粉末）が入っていたプラスチック袋は編むことでバックやポーチへと姿を変えていきます。ごみを少しずつでも減らすことで川の水や土壌がきれいになり、農作物のできもよくなったりするのではないかと考えました。生ごみなどの残飯をコンポストにして肥料へと変えることでマラリヤなどの病気の媒介の危険性も未然に防ぐことができると思いました。

こんなにきれいで広大な自然や真っ青な海があるのに、ごみによって汚かったらもったいないと思いました。日本もインドネシアも互いがきれいになっていけばいいなと考えているので、もっともっとうこういった活動に参加していきたいなと強く思うようになりました。



5. ロンボク島のごみ銀行について

長澤美佳



私はこのエコツアーに参加するまで「ごみ銀行」の存在を知りませんでした。私にとって、ごみの処理や衛生管理が整っている環境での生活は当たり前のことであり、町中にごみが大いに落ちているという状況は正直想像もつきませんでした。しかし、日本も初めからこのような環境が整っていたわけではないと思い、“原点”を知るという意味でもロンボク島の現状を実際に見て、様々なことを感じてみたいと思いました。

そして、ロンボク島ではごみ問題(環境問題)の視点だけではなく、文化や人々の暮らしについても知りたいと思いました。

ごみ銀行とは？

ごみ銀行とは、ごみを集め資源として活用したり、現金が得られたりするシステムです。地域住民などが、日常で出るごみや町中に捨てられているごみなどを集め、ごみ銀行に持ち込みます。持ち込まれたごみ資源は銀行のように指定の「通帳」(写真2)によって管理されます。通帳にはごみの種類や量などが記載され、その人がどれくらいの資源ごみを持ち込んでいるのか一目でわかるようになっています。そして、持ち込まれたごみ資源は廃品業者へ売ったり、商品(ごみ資源を利用して作られた商品)として販売したりして得た売上から住民へ料金が支払われます。そのため、一度にたくさんのごみを収集できない人にとっても、その人のペースでごみ資源を集めることができ、誰もが参加しやすいシステムになっています。



(写真1 ごみ銀行紹介のパンフレット)



(写真2 ごみ銀行ごとに発行されている通帳)

様々なかたちのごみ銀行

【家族で運営する ウダヤナごみ銀行】 見学対応者：リスさん

自宅の一角をごみ銀行のオフィスとして使用し活動を行っていました。運営者の一人であるリスさんは、最初は誘われたことがきっかけでこのごみ銀行の活動に参加したそうです。しかし活動に関わるにつれ「ごみはまだ使える資源であると考えられるようになった」と自身の意識が変わったことも話してくれました。

ロンボク島ではまだ住民へのごみに対する意識が低いこともあり、町中にはたくさんのごみが落ちています。大雨が降ると川に大量のごみが溜り洪水になってしまうこともあるそうです。その為、ごみ銀行の存在は、住民のごみへの意識の向上と気づきにつながるので良いことだと話してくれました。

ごみ銀行を広めるために、ごみ資源を使ったクラフト作りの講習も積極的に行っているとのことでした。一方で、ごみ銀行の定義がはっきりしていないのが現状だそうです。



(写真3 ウダヤナごみ銀行で)



(写真4 食品パッケージで作った個性的なバッグ)



(写真5 細かな切れ端も無駄にせずクッションとして再利用)

【村の連携で成り立つ シウン・グミランごみ銀行】 見学対応者：ハミドさん

西ロンボクのレレデ村にあるシウン・グミランごみ銀行では、代表者のハミドさんが自身の住む村の人たちの意識を高めようと、村を巻き込んだかたちで活動を行っています。

実際にごみの分別されている様子や子どもたちがごみ資源の仕分けを手伝う様子も見学させて頂きました。

まだまだ村単位の小さな活動なので、ごみ資源を利用したクラフト商品については一部分しか作ることができず、その先の技術までは進んでいないとのことでした。そして、ごみ銀行の存在により村人たちのごみへの意識が高まる一方で、ごみ資源を管理する場所が確保できないことやごみ銀行を運営するにあたっての資金を集める大変さなど運営についての課題も話してくれました。



(写真6 子供たちも仕分け作業をお手伝い)



(写真7 分別されたごみ)

【様々な資源をビジネスにする NTB マンディリ銀行】 見学対応者：アイシャさん

ロンボク島の中でも一番成功しているごみ銀行です。代表者のアイシャさんが中心となり商品の開発を行っています。アイシャさんはごみ資源を見てどのような商品にするかを考えるのが得意なため、商品のアイテム数もたくさんありました。商品はドイツやオーストラリアなど海外にも送っています。さらに、現在は障がい者雇用にも着手しビジネス的な要素の強いごみ銀行でした。



(写真8 古い雑誌を利用してクラフト作り)



(写真9 クラフトづくりの様子)

【市の協力を得ながら活動する リサングみ銀行】

見学対応者：ヌルニアさん、代表者：ウィビサナさん

リサングみ銀行は 2011 年に住民の生活支援の一環として、ジャワ島の廃品業者がごみ資源を買い取る支援により活動が開始しました。しかし、ジャワ島の廃品業者にとってここでのごみ資源の買い取りは利益がでないという理由から活動が一時とどまってしまいうこともありました。その後、マタラム市役所の支援を受け運営を再開しています。また、インドネシアには貧しい方への支援として政府がお米を安く売るというプログラムがあります。そのお米を現金ではなく、ごみ資源と引き換える活動も始まっています。(コンポストを作る活動もあります)リサングみ銀行はビジネス的要素よりもソーシャルビジネス的な要素が強いごみ銀行でした。現在はジャカルタの政府にも認められ、マタラム市として活動をしています。



(写真 10 ごみ銀行について語るヌルニアさん)



(写真 11 さまざまな材料がクラフトに)

感想

今回、見学させて頂いた 4 か所のごみ銀行はそれぞれに特色があり大変興味深いものでした。また、企業や学生などと一緒にごみ銀行の活動を行ったらどのような活動ができるのか、様々な視点とアイデアで面白いものができるのではないかともしました。一方で、ごみ銀行を運営する方々が活動を継続するために課題と向き合いながら頑張っている様子や運営者の思いと努力を知ることができ、ごみ銀行を立ち上げさらに活動を住民に浸透させていくことは本当に大変なことだと感じました。そしてごみ銀行の方々が口々に言われていたことは、これらの活動が少しずつですが、住民のごみ問題への意識改革につながっているということでした。その言葉に私自身もとても嬉しくなりました。

時代の流れとともに私たちの生活も豊かになり、自然に返すことができない様々な種類のごみもたくさん増えています。だからこそ、ごみを資源として生かせる方法も考える必要があるのだと思いました。日本もごみ処理や衛生管理についてのシステムは形になっていますが、そもそもシステムが整っているから良いということではなく、ごみをなるべく出さない

という意識と工夫を考えることこそ必要なのだと改めて考えさせられました。ロンボク島のごみ問題の状況を見て、私の頭に一番に浮かんだ言葉は「食べ物の廃棄」でした。日本の食品廃棄量は世界でトップクラスとも言われています。私たちは限られた資源と環境と共生して暮らしていかなければなりません。基本的なことかもしれませんが、「食べ物を無駄にしているか」「水や電気、ガスは使いすぎているか」など自分自身が当然と思っている生活環境を今一度振り返りたいと思いました。

今回、エコツアーの参加は私にとって普段、あまり意識していなかった環境問題を自分のこととして考える大きなきっかけになりました。そして、ロンボク島の人との交流を通し、彼らの文化や暮らし、さらには人々の温かさをも感じ、今後の私自身の人生において大きな糧となる経験ができました。このような機会を頂けたことを心から感謝し、この経験を活かせるようにしていきたいです。ありがとうございました。

6. ごみ問題の側面から見た異文化理解について

服部詩織

今回のエコツアーでのテーマであるゴミ問題について異文化理解の面から考えたことを書きます。

タナ・ベア村やギリ・トラワンガンでのゴミ問題について考えた時間はとても貴重なものになりました。タナ・ベア村で行ったワークショップで、私たちは日本でのゴミ処理・収集方法やゴミに対する考え方を発表しました。ゴミを集めて捨てることや、ゴミを分別すること、そもそも燃えるゴミ（ロンボクではオーガニックという）とは何かという日本では常識的なものも、村の人々にとっては、どうして1円にもならないゴミを集めるのか、異質な考えと捉えられたと感じました。しかし、環境や健康について鑑みれば、ゴミの処理方法について考え、改善することは重要であると伝えなければならず、また私たちも当然そうすべきだと押し付けるのではなく、ゴミの問題が発生していることを理解し、どうすべきか一緒に考え、同等の立場で考えることが必要だと思います。

ゴミの処理方法について日本では、3R（何度も使う、ごみになるものを使わない、リサイクルをする）という考え方があるが、ごみ銀行を運営している人たちは、不用品をゴミではなく商品として価値あるものにするという方法をとっています。これはインドネシアではジュースやコーヒーなどの個包装のゴミが大量に捨てられるためになせるものであり、人々の理解と協力が得られればよりこの活動は拡大していくと思います。一方この活動は画期的ですが、日本に持ち込んでもうまくいかないと思います。

つまり、具体的なゴミ処理の方法に正解はなく、その土地で発生するゴミ問題の解決のためにはその土地で暮らす住民の意識が最も重要なのだと思います。したがって、異文化理解とは、相手と同じ目線で、決して考えを押し付けることなく、互いの考えを認めることだと考えます。ただ今回このような機会があり、村やいくつかごみ銀行をまわってみて感じたことは、相手の考えをただ受け入れるというのではなく、いろいろな意見を交わしたり、改善点を一緒に考えたりすることで互いに高め合おうとすることが異文化交流と言えるのではないだろうかということです。



〒155-0032

東京都世田谷区代沢 2-19-12

メールアドレス : yuitool@gmail.com

ホームページ : <http://yui-tool.jimdo.com/>

ゆいツールブログ :

<http://blog.goo.ne.jp/yui-tool>

連絡先 : 090-4420-6867 (代表携帯)